

平成 29 年度第 3 回
我孫子市いじめ防止対策委員会

日 時 平成 3 0 年 2 月 2 0 日 (火曜日)
午後 3 時 00 分～午後 4 時 30 分

場 所 我孫子市教育委員会 大会議室

平成29年度 第3回いじめ防止対策委員会

平成30年2月20日（火）

我孫子市教育委員会大会議室

15:00～

1 開会（横山センター長）

2 会議の公開について …（横山センター長）

- ・傍聴者なし

3 いじめ防止対策に関する報告および協議

（1）【第2回いじめについてのアンケート集計結果についてと、（2）調査後の取組及考察について】

<センター長>

- ・はじめに、アンケートの集計結果、併せて考察について報告する。概ね、1回目の結果と大きな変化は見られなかった。しかし小さな変化を見逃さず取り組んでいくことが大切だと考えている。
- ・【アンケート結果を基にしての考察】今回の改善点について。一つ目として、質問項目の前に「先生に相談したいことがありますか」「誰に相談したいですか」を追加した。夏に行われた中学生と教育委員との懇談の中で「アンケートにはなかなか正直に書けない」という声があった。二つ目に、インターネット関係の項目について回答しやすくするために、選択肢の順位を上げた。
- ・認知数より多い子ども達が「相談したいことがある」と回答した。いじめまでいかない軽微なものやいじめ以外に悩みを抱える児童生徒がいて、教育相談が実施されたことは大きな成果である。ただ、担任以外の先生を相談相手に指名してしまうと、担任を傷つけやしないかと心配になり、書けなかった児童生徒もいたのではないかと考える。
- ・検討事項として、アンケートは無記名であるが、相談したいと記述した児童生徒とは、すぐに個人を特定して面談する必要がある。今後、相談したい場合は記名してもらう等の工夫が必要になる。しかし、記名式にしてしまうと、正直に書けなくなってしまう危険性もある。基本は無記名だが、「相談したい人は記名してください」等の対応を考えている。
- ・選択肢の順位を上げた点においては、変化はなかった。

次に【前回、課題とし提示した5点】について。

- * 認知数の問題
- * だれにも相談していない被害者の問題
- * 気晴らしでいじめているという問題
- * 傍観者が多いという問題
- * 未解消事案の問題

※「認知数の問題」について

いじめの認知数の問題について。小学校で472件、中学校31件で、認知率としては、小学校7.5%、中学校1.0%。小学校では横ばい、中学校では減少した。例年6月の1回目と11月の2回目を比較すると、2回目は減少傾向にあるが、今回は横ばいになった。原因はどこにあるのか。棒グラフを見ると、小学3年生をピークに低学年は増加した。この時

期、認知数が増えるということは「学級経営がうまくいっていないのではないか」と考え、この疑問を解決するためにQ-U検査とクロスして考察してみた。

- ・まず、プロット図の見方を説明する。下の方にいるほど承認得点が低く、左にいたるほど侵害感が強くいじめが心配される。さらに要支援群に位置する子は心配な児童・生徒である。「侵害行為認知群」は「嫌なことをされる」「仲間に入れてもらえない」「無視される」などと感じている児童生徒。「学級不満足群」は、加えて自己肯定感が低く、いじめや悪ふざけを受けている可能性が高い。いじめに関係があるのは特にこの二つの群である。
- ・小学校中学年においてはいじめを受けている可能性は高く、高学年になると減少する。しかし、中学1年になると増加し、2年生で減少する。「要支援群」については、小学4年生、中学1年生が多い結果となっている。

<Q-U検査といじめアンケートの結果を比較>

- ①共通点…両方において、3・4年生はいじめられ感を持っている児童が多いが、5・6年生になると減少する。
- ②相違点…中1・2年生において、Q-U検査ではいじめられ感を持った生徒は多いのに、いじめアンケートにおける認知数は少ない。
- ③考察…違いをどうとらえるか。

中学生はいじめアンケートに正直に回答していないのではないか。

「いじめアンケート」は、いじめを発見する一つのツールである。子ども達の心をすべて映し取れるかという点、そうではない。それを補うために「Q-U検査」という別のツールを実施している。いじめられていると回答しない子であっても、不満足群であったり要支援群に所属する場合、担当指導主事が学校に出向き、学級での様子を観察したり管理職等と話したりして把握に努めている。

※「だれにも相談していない被害者の問題」について

「誰にも相談していない」の割合が小中とも増加している。そんな中で、相談相手として「先生」が順位を上げたことは信頼回復の成果ではないかと考える。

- ・「いじめのサインチェック表」は、今後も活用し、継続して見守っていきたいと考える。

※「気晴らしでいじているという問題」について

いじめ理由「気晴らし」「楽しいから」との回答は、小学校14人、中学校2人で、前回比較で中学生は1人増えたが、小学生は8人も減っているのは成果であると考え。

※「傍観者の問題」について

いじめられているのを見たとき、「黙ってみている」「一緒に笑ったりからかったりしている」と回答したのは小学校99人、中学校14人。小中とも前回より減少し、小学生が30人も減ったのは成果である。

- ・誰かに相談し解決してもらおうとしている割合が小中とも増加しているが、様々な要因があり、直接、相手に注意するのは難しいと考える。

※未解決事案の問題

今回増加している。いったん解決しているものの、慎重にまだ見守りが必要であるという理由で「未解決事案」として挙がっている。個別の事案については佐藤指導主事から報告する。

- ・各学校からの報告では、小学校5件、中学校3件であった。現在の状況としては、8件とも

解消しているが、さらに経過観察をする。

- ・いじめ解消の状態は、「行為がやんでいる状態が3か月継続していること」、かつ、「被害者が心身の苦痛を感じてないこと」、この2点加わり、学校は対応している。今後、いじめがやんだことの判断や、苦痛の確認などの課題が考えられる。
- ・なお、1回目にあがっていた未解消事案は、学校よりすべて解消という報告があった。

<議長>：ここまでの報告、説明で、何かご質問ご意見があればお願いしたい。ただ今の報告では、事実に沿った言葉を濁さない説明がなされたが、いじめ解決のための姿勢の表れとご理解いただきたい。また、未解消・解消の判断は難しい問題である。いじめられている本人が苦痛を感じているかどうか判断の基準であり、3か月の見守りの指針が示されたことを踏まえ対応していきたいと思う。

<三澤委員>：報告の事案はどのように発覚したのか。

<佐藤主事>：アンケートからの聞き取りや、本人の様子を見ての声かけ、本人からの訴えである。

<三沢委員>：机などのいたずら書きは、緊急度が高いわけで、その対応はどうだったのか。

<佐藤主事>：すぐに状況を聞き、複数の教員で対応した。本人にも「重大性」を説明し、もし同様のことがあったら直ちに報告するように話をしている。

<村田委員>：事例の中で、「保護者に連絡をした」とあるが、加害者側の保護者に対してはどうか。

<佐藤主事>：どの事例も被害者側だけでなく、加害者側の保護者にも連絡をとり、共に解決していけるように相談している。

<村田委員>：事例の中では、殴られたということもあり、重大ととれるが、見方によっては、子供同士のけんかではないか。保護者の中には、「呼び出されるほどか」という感じの方はいなかったか。

<佐藤主事>：今回の事例では、いなかった。どの保護者も、「申し訳ありません」という姿勢だと聞いている。「いじめ問題」は、いじめられた側が苦痛を感じるなど受け取り方が重要であるということが多くの保護者にも認識されてきたと感じている。

(3)【Q-U 検査について】

<佐藤主事>：いじめ対策項目について、我孫子市と全国の比較を提示した。いじめ項目「嫌なことを言われたり、からかわれたりしてつらい」に対して、『4とてもそう思う』が、我孫子市6.2%、全国14.0%であった。『3少しそう思う』が我孫子市18.7%。全国28.7%とある。この二つの割合が多いのは、嫌な思いをしている子が多く、いじめにつながる事が考えられる。さらに「全国との比較の欄を見てほしい。△マークは全国と比較して、大きく望ましい方向にあるというマークである。我孫子市の状況としては小中学校共に、どの学年、どの項目もほぼ「△」で、全国より大きく望ましい方向にある。しかし、安心しているわけではない。やはり「0」を目指さなくてはいけないと考えている。嫌な思いをしている子がいるのは確かである。何か改善点があるはず、何か取り組み方があるはずという姿勢で取り組んでいきたい。

(4)【各学校における具体的な取り組みについて】

<議 長>：Q-U 検査は、学級経営状況を見るものだが、いじめ項目にも着目して、子どもたちの把握に努めている。いじめアンケートと Q-U 検査の両方を活用して対応していることを理解してほしい。

<センター長>：映像を映しながらの説明

今年度の重点である、「児童・生徒の主体的な取り組み」について発表する。

(5)【来年度に向けて】

<センター長>：今年度の新たな取り組みとして、①児童生徒による主体的な「いじめ防止」の取り組み。②中学生と教育委員の懇談会の実施。③「いじめサイン 学校編・家庭編」の活用を実施した。

・挨拶運動については以前からあったが、いじめ防止に関連させて取り組んだという点が新しい。児童生徒が主体的に取り組むことで、意識の向上が図られたとの喜びの声が上がっている。教師の指導はいじめ防止の要として大切であるが、子どもたちが自ら立ち上がり思考し実践することで、確実に全校に広がっていく。来年度も継続して取り組んでいきたい。

4. 意見交換

<議 長>：意見交換ということで、ご意見、ご感想をお願いしたい。

<村田委員>：報告を通して、ほのぼのとした気持ちになった。いじめについての認識が保護者にも広がっていると感じた。教育委員会や学校の取り組みもわかり、今後も児童生徒のために、保護者も含めしっかり取り組んでいけたらと思う。

<佐藤委員>：子どもたちが自主的に、何ができるかを考え取り組んでいる姿は、生徒会活動や全校集会など各校それぞれあるが、「自分たちで行った」ということが大きいと思う。「させられている」と「自分たちがやっている」とでは大きな違いがあると思う。

<久米委員>：キラリの木を見せてもらったが、その一つに「休み時間遊ぶ相手がいなかったが、声をかけてもらいうれしかった」というのがあり、我孫子市の地道な取り組みの表れではないかと感じた。「いいとこ探し」の取組で、「誰々ちゃんが優しい」と個人名が書かれており、書かれた子はうれしいのではと思う。また、いじめの背景を考えると、家庭の貧困や虐待の問題がある。虐待された子がいじめの加害者になるといういじめの連鎖などがあり、子ども同士が謝っただけでは解決できないこともある。アンケートの問題では、記名にするなどの話が出たが、ある学校では校長先生だけが開けられる投書箱に入れ、相談相手を担任に限定することなく相談活動を実施しているところもある。中には担任と合わない子もいるはずで、児童生徒があきらめないで相談できる体制が必要だと思う。

<川瀬委員>：担任とウマが合わないというのは、実際にあると保護者から聞いている。感想として、いじめアンケートの未解消の事例をみると、いじめられる側にもいじめられる原因があるのではと感じることがある。また、各学校の取り組みを聞いて、他校でもどんどん真似をしてもいいのではないかと思う。校長会などで紹介して、よい

取り組みを広げていけばと思う。

- <栗原委員>：いろいろな生徒がいるように、先生にもいろいろな先生がいて、子どもとの相性があると思う。新聞報道で問題になっていた記事では、担任が抱え込んで管理職に報告していなかったという例があった。やはり、そういう体制は改善する必要がある。市内の各学校の取り組みについては感心した。
- <稲村委員>：いじめ問題があったら、必ず両方の保護者に事実を伝えることが大切である。それは被害者も加害者も両方とも心配をしなくてはいけないからで、そういうスタンスで取り組んでいる。保護者と話をすることは、家庭状況を把握でき、大人が入ればよいサポートができると考えている。いじめはいろいろなところからの情報があるほどよい。保護者同士の横のつながりで気にかかることがあれば、学校に連絡して欲しい。実際にそういう情報から解決につながったケースもあり、大人が手をつなぎ、子どもが真ん中にあることが大切だと思う。
- <鈴木委員>：いじめに対する活動はどの学校も日常的に行っている。いじめは小さなことは日々起きていると考え、組織的に指導しているのが現状である。貧困問題や家庭内暴力など様々な問題を抱える家庭があり、学校でできる対応も限界があるので、他の機関と連携していくことが大切だと思う。いじめがあると親から連絡が来ることがあるが、親同士の複雑な関係性があったり、「うちの子とわからないように指導して欲しい」という難題を持ち込まれたりなど、大変難しい問題がある。
- <斎藤委員>：現実として、貧困など家庭環境に起因する問題が多くある。最近ではDV問題が多くなっている。一つの場所で解決できることは少なく、ケースワーカーなどの連携が不可欠で、いじめ問題はいろいろな部署との連携を重ねていくことが大切だと思う。
- <三澤委員>：いじめる側の理由として「気晴らしで」「いらいらして」と回答があるが、その原因は何か…を探ることが重要ではないか。アンケート内容では、「いらいらの原因は何ですか」などの深い質問も必要ではないか。ある電話相談では「市内の中学生の娘がいじめを受けている。どうにかならないだろうか」と保護者からあったが、学校名や学年が分かったので、学校と連絡をとり、すぐに対応してもらい、解決に至ったという事例があった。やはり、多方面との連携は大切だと思う。
- <小島委員>：教育委員会としても、アンケートやQ・U検査の考察から、少しでもいじめをなくす方向で取り組んでいきたいと思う。いじめの認知数を受けとめ、日常の問題をもう一度見返して、いじめ問題を丁寧にとらえてほしいと思う。また、各学校で、「問題が学校全体としてとらえられていない」ということがないよう、真摯に対応することが大切だと思う。
- <議長>：率直なご意見をいただき、うれしく思う。変に隠さずに意見を言えるところがこの委員会のよいところである。問題を共有できることが大切で、学校、PTA、地域の連携、行政の支えが必要だと思う。

5. 諸連絡

<センター長>：来年度の日程について。

6. 閉会